

ない」が 241 名 (1.5%) であった。3 回目は、「できる」が 15,821 名 (97.9%)、「できない」が 335 名 (2.1%) であった。4 回目は、「できる」が 15,576 名 (96.4%)、「できない」が 580 名 (3.6%) であった。

これらの結果、自分の名前をいうことが「できる」高齢者は、初回、2 回は、98.5%、3 回目 97.9%、4 回目 96.4%と示され、「できない」要介護高齢者の割合は、2 回目から 3 回目、3 回目から 4 回目にかけて増加していた。

要介護度別には、非該当は 2 回目の 95.7%を除いてすべて 100%、自分の名前をいえる人々の集団であった。要支援から、要介護 3 までのほとんどが自分の名前をいうことができたが、初回から 4 回目までに、自分の名前をいえる人は、回数が増加するにしたがって減少していた。要介護 4 と 5 は、初回から 2 回目に、それぞれ 94.2%から 95.0%へ、86.0%から 92.2%へと自分の名前をいえる人が増加していたが、3 回目、4 回目は減少していた。

表 103 要介護度別自分の名前をいう「できない」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0.3	1.1	3.3	5.8	14.0	1.5
2回目	4.3	0.2	0.5	1.6	3.4	5.0	7.8	1.5
3回目	0	0.3	0.8	2.5	4.7	5.6	9.0	2.1
4回目	0	0.9	2.0	4.2	7.8	8.1	10.1	3.6

(40) 今の季節を理解

全体的に今の季節の理解については、「できる」が 13,397 名 (82.9%)、「できない」が 2,759 名 (17.1%) であった。2 回目は、「できる」が 13,106 名 (81.1%)、「できない」が 3,050 名 (18.9%) であった。3 回目は、「できる」が 12,501 名 (77.4%)、「できない」が 3,655 名 (22.6%) であった。4 回目は、「できる」が 11,749 名 (72.7%)、「できない」が 4,407 名 (17.7%) であった。

このように今の季節を理解できない要介護高齢者の割合は、全体としては、初回 17.1%、2 回目 18.9%、3 回目 22.6%、4 回目 27.3%と、初回から 4 回目まで、漸次、増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 3 までは、初回から 4 回目まで、漸次、今の季節を理解できる人は、減少していた。要介護 4 と 5 は、それぞれ、62.9%が 66.6%へ、53.7%が 65.1%へと初回から 2 回目に増加していたが、2 回目から 3 回目、3 回目から 4 回目は、他の要介護度と同様に、今の季節を理解できる人は減少していた。

表 104 要介護度別今の季節を理解「できない」の割合（％）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	4.2	10.5	22.3	32.1	37.1	46.3	17.1
2回目	13.0	6.1	14.1	25.3	31.3	33.4	34.9	18.9
3回目	17.4	8.7	18.1	30.0	35.1	36.8	35.2	22.6
4回目	21.7	12.8	22.7	34.8	40.0	42.5	39.4	27.3

(41) 場所の理解

全体として、場所を理解することについては、初回は、「できる」が14,656名（90.7%）、「できない」が1,500名（9.3%）であった。2回目は、「できる」が14,433名（89.3%）、「できない」が1,723名（10.7%）であった。3回目は、「できる」が14,007名（86.7%）、「できない」が2,149名（13.3%）であった。4回目は、「できる」が13,303名（86.7%）、「できない」が2,853名（13.3%）であった。

このように場所を理解することができない要介護高齢者の割合は、初回 9.3%、2回目 10.7%、3回目 13.3%、4回目 17.7%と増加していた。

要介護別には、非該当は、初回は場所の理解ができるが100%であったが、2回目は91.3%と減少し、3回目は95.7%と増加したが、4回目については91.3%と減少していた。要支援から要介護3までは、場所の理解ができる割合は、回数が増加するにしたがって減少していた。要介護4は、初回が70.7%で2回目が74.5%と場所を理解できる割合は増加するが、3回目71.3%と減少し、4回目も減少していた。要介護5は、初回の64.5%から、2回目73.1%、3回目74.0%と増加し、4回目70.4%と減少していた。しかし、70.4%という割合は、要介護2や4の割合よりも高かった。

表 105 要介護度別場所の理解「できない」の割合（％）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.8	3.8	10.9	20.9	29.3	35.5	9.3
2回目	8.7	2.0	5.8	13.9	22.2	25.5	26.9	10.7
3回目	4.3	3.1	8.7	17.6	24.9	28.7	26.0	13.3
4回目	8.7	5.8	12.9	22.8	31.2	33.0	29.6	17.7

(42) 物を盗られたなどと被害的になることがあるか

全体としては、物を盗られたなどと被害的になることが、初回は「ない」が14,149名（87.6%）、「ときどきある」が796名（4.9%）、「ある」が1,211名（7.5%）であった。2回目は、「ない」が14,319名（88.6%）、「ときどきある」が758名（4.7%）、「ある」が1,079名（6.7%）であった。3回目は、「ない」が14,331名（88.7%）、「ときどきある」が731名（4.5%）、「ある」が1,094名（6.8%）であった。4回目は、「ない」が14,343名（88.8%）、「ときどきある」が742名（4.6%）、「ある」が1,071名（6.6%）であった。

これらの結果から、物を盗られたなどと被害的になることが、「ときどきある」「ある」という問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回は12.4%、2回目は11.4%、3回目は11.3%、4回目は、11.2%と回数が増加するにしたがって、減少する傾向が見られた。

要介護度別には、物を盗られたなどと被害的になることがある人の割合は、非該当では3回目に4.3%発生するだけで、初回、2回、4回とも0であった。要支援では、こうした問題行動がある人は、初回から4回にかけて増加していた。要介護1では、初回、2回目が88.4%、3回目、4回目が88.3%とほとんど変化がなかった。要介護2と3においては、回数が増えるにしたがって、こうした問題行動がある人の割合は減少していた。要介護4と5は、初回から2回目においては、問題行動のある人の割合は減少していたが、一方で3回目、4回目では増加していた。

表 106 要介護度別被害的「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	7.3	11.6	16.7	16.0	12.8	8.7	12.4
2回目	0	7.7	11.6	14.2	13.3	9.3	7.5	11.4
3回目	4.3	8.4	11.7	13.4	12.3	9.6	8.1	11.3
4回目	0	9.3	11.7	12.3	12.2	9.7	9.3	11.2

(43) 作話し、周囲に言いふらすことが (作話)

全体として、作話し、周囲に言いふらすことが、初回は、「ない」が14,801名(91.6%)、「ときどきある」が558名(3.5%)、「ある」が797名(4.9%)であった。2回目は、「ない」が14,847名(91.9%)、「ときどきある」が555名(3.4%)、「ある」が754名(4.7%)であった。3回目は、「ない」が14,876名(92.1%)、「ときどきある」が479名(3.0%)、「ある」が801名(5.0%)であった。4回目は、「ない」が14,888名(92.2%)、「ときどきある」が494名(3.1%)、「ある」が774名(4.8%)であった。このように、作話をし、周囲に言いふらすことがある人の割合は、初回8.4%、2回目8.1%、3回目7.9%、4回目7.8%とわずかに減少していた。

要介護別には、非該当において作話をする人は、初回から3回目までは4.3%と同じで、4回目には0となっていた。要支援から要介護1までは、作話の問題行動がみられる割合は、認定回数が増えるにしたがって、増加していた。一方、要介護2から4までは、この問題行動が発現した割合は、初回が最も高く、4回目まで減少していた。要介護5は、初回93.4%で、2回目90.1%と作話をする割合が増加していたが、2回目、3回目は減少していた。

表 107 要介護度別作話「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	3.6	6.8	11.3	13.5	12.6	6.6	8.4
2回目	4.3	5.1	7.4	10.1	11.0	8.5	9.9	8.1
3回目	4.3	5.3	7.5	10.0	9.6	7.6	8.4	7.9
4回目	0	5.5	7.6	9.7	9.4	7.5	6.9	7.8

(44) 実際にはないものが見えたり、聞こえることが (幻視幻聴)

全体として実際にはないものが見えたり、聞こえることあるという幻視幻聴の問題行動について、初回は、「ない」が14,223名(88.0%)、「ときどきある」が877名(5.4%)、「ある」が1,056名(6.5%)であった。2回目は、「ない」が14,416名(89.2%)、「ときどきある」が795名(4.9%)、「ある」が945名(5.8%)であった。3回目は、「ない」が14,416名(89.2%)、「ときどきある」が771名(4.8%)、「ある」が969名(6.0%)であった。4回目は、「ない」が14,358名(88.9%)、「ときどきある」が794名(4.9%)、「ある」が1,004名(6.2%)であった。

このような幻視幻聴の問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回は12.0%で、2回目は10.8%と減少し、3回目も10.8%と同じで、4回目に11.1%とわずかに増加していた。

要介護別には、非該当から要介護1までは、幻視幻聴がある高齢者の割合は、認定回数が増加するにしたがって、増加していた。要介護3と要介護5は、認定回数が増加するにしたがって、問題行動がある高齢者の割合は低下していた。要介護2は、初回から3回目までは、幻視幻聴の問題行動がある高齢者の割合は減少していたが、4回目には増加していた。要介護4は、初回から2回目にかけては問題行動がある高齢者の割合は減少していたが、3回目で増加し、4回目で再び減少していた。要介護5は要介護2、3、4に比較して、この問題行動がある高齢者の割合は低かった。

表 108 要介護度別の幻視幻聴「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	4.7	8.8	16.3	19.3	19.3	22.4	12.0
2回目	4.3	5.4	8.9	14.5	15.4	14.4	15.2	10.8
3回目	4.3	6.1	9.2	13.9	14.8	14.7	13.1	10.8
4回目	8.7	7.4	9.7	14.1	14.4	14.1	10.4	11.1

(45) 泣いたり、笑ったりして感情が不安定になることが (感情が不安定)

全体として、泣いたり、笑ったりして感情が不安定になる問題行動は、初回は、「ない」が13,743名(85.1%)、「ときどきある」が1,071名(6.6%)、「ある」が1,342名(8.3%)であった。2回目は、「ない」が13,733名(85.0%)、「ときどきある」が1,127名(7.0%)、

「ある」が1,296名(8.0%)であった。3回目は、「ない」が13,618名(84.3%)、「ときどきある」が1,047名(6.5%)、「ある」が1,491名(9.2%)であった。4回目は、「ない」が13,500名(83.6%)、「ときどきある」が1,089名(6.7%)、「ある」が1,567名(9.7%)であった。

これらの結果、感情が不安定になるという問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回14.9%、2回目15.0%、3回目15.7%、4回目16.4%と増加する傾向が見られた。

要介護度別に感情が不安定となる問題行動がある割合をみると、要支援や要介護1においては認定回数が増加するにしたがって高くなっていた。要介護3と4において、初回から2回目、2回目から3回目は、問題行動がある割合が減少するが、一方で、3回目から4回目に増加していた。要介護2と要介護5は、初回から2回目に、この問題行動がある割合は減少するが、2回目から3回目には増加し、3回目から4回目では要介護2は減少するのに対し、要介護5では増加していた。

表 109 要介護度別感情が不安定「ある」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	7.7	11.5	18.8	22.4	26.0	22.7	14.9
2回目	17.4	8.5	12.7	18.3	20.9	23.1	20.0	15.0
3回目	13.0	9.6	13.9	19.2	20.8	21.4	20.6	15.7
4回目	17.4	10.4	15.4	18.5	21.5	21.6	23.0	16.4

(46) 夜間不眠あるいは昼夜の逆転が(昼夜逆転)

全体としては、夜間不眠あるいは昼夜の逆転は、初回において、「ない」が12,868名(79.6%)、「ときどきある」が1,431名(8.9%)、「ある」が1,857名(11.5%)であった。2回目は、「ない」が13,195名(81.7%)、「ときどきある」が1,308名(8.1%)、「ある」が1,653名(10.2%)であった。3回目は、「ない」が13,158名(81.4%)、「ときどきある」が1,270名(7.9%)、「ある」が1,728名(10.7%)であった。4回目は、「ない」が12,944名(80.1%)、「ときどきある」が1,287名(8.0%)、「ある」が1,925名(11.9%)であった。

これらの結果から、夜間不眠あるいは昼夜の逆転が「ときどきある」「ある」という要介護高齢者は、初回20.4%、2回目18.3%と減少するが、3回目は18.6%と増加し、4回目も19.9%と増加していた。

要介護度別には、要支援において、昼夜逆転は認定回数が増加するにしたがって増えていたが、逆に要介護4においては、認定回数が増加するにしたがって減少していた。要介護1では、初回から2回目に昼夜逆転は減少するが、3回目、4回目と増加していた。要介護2と3は、3回目まで減少するが、4回目では増加していた。要介護5は、初回が最も昼夜逆転の割合が高く、4回目が最も低かった。

表 110 要介護度別昼夜逆転「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	10.2	15.8	24.6	31.8	35.3	35.5	20.4
2回目	13.0	11.4	15.1	22.6	26.0	26.0	23.6	18.3
3回目	4.3	12.4	16.4	21.8	24.9	24.6	23.6	18.6
4回目	13.0	14.4	18.0	22.9	26.3	23.6	22.4	19.9

(47) 暴言や暴行が (暴言暴行)

全体として暴言や暴行が、初回は「ない」が 14,537 名 (90.0%)、「ときどきある」が 713 名 (4.4%)、「ある」が 906 名 (5.6%) であった。2 回目は、「ない」が 14,554 名 (90.1%)、「ときどきある」が 712 名 (4.4%)、「ある」が 890 名 (5.5%) であった。3 回目は、「ない」が 14,334 名 (88.7%)、「ときどきある」が 776 名 (4.8%)、「ある」が 1,046 名 (6.5%) であった。4 回目は、「ない」が 14,246 名 (88.2%)、「ときどきある」が 789 名 (4.9%)、「ある」が 1,121 名 (6.9%) であった。

これらの結果、暴言や暴行がある要介護高齢者の割合は、初回は 10.0%、2 回目 9.9%、3 回目 11.3%、4 回目 11.8%と、初回から 2 回目にわずかに減少するが、3 回目、4 回目と漸次、増加していた。

要介護度別には、非該当、要支援、要介護 1 と 5 は、すべて暴言暴行ありの割合は、認定回数が増加するにしたがって増加していた。要介護 2 から 4 までは、初回から 2 回目までに減少していた。2 回目から 3 回目の変化において、要介護 2 と 3 は増加し、要介護 4 は減少していた。3 回目から 4 回目において、要介護 2 と 4 は増加するが要介護 3 は減少していた。

表 111 要介護度別暴言暴行「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	3.5	7.5	13.0	18.2	17.0	13.4	10.0
2回目	4.3	4.1	8.2	12.8	15.4	15.4	14.0	9.9
3回目	8.7	5.5	9.6	14.0	18.1	14.5	14.6	11.3
4回目	8.7	5.9	10.4	14.5	17.8	15.8	15.8	11.8

(48) しつこく同じ話をしたり、不快な音を立てることが (同じ話をする)

全体としてのしつこく同じ話をしたり、不快な音を立てる問題行動は、初回は「ない」が 12,790 名 (79.2%)、「ときどきある」が 989 名 (6.1%)、「ある」が 2,377 名 (14.7%) であった。2 回目は、「ない」が 12,754 名 (78.9%)、「ときどきある」が 927 名 (5.7%)、「ある」が 2,475 名 (15.3%) であった。3 回目は、「ない」が 12,725 名 (78.8%)、「ときどきある」が 883 名 (5.5%)、「ある」が 2,548 名 (15.8%) であった。4 回目は、「ない」が 12,694 名 (78.6%)、「ときどきある」が 866 名 (5.4%)、「ある」が 2,596 名 (16.1%)

であった。

このように、しつこく同じ話をしたり、不快な音を立てるといった問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回 20.8%、2回目 21.1%、3回目 21.2%、4回目 21.4%と漸次、増加していた。

要介護度別には、この問題行動が多かったのは、要介護 2 であった。変化については、非該当と要支援においては認定回数が増えるにしたがって、同じ話をするという問題行動がある割合は増加していたが、逆に要介護 2 と要介護 4 においては、認定回数が増えるにしたがって、問題行動がある割合が減少していた。要介護 1 と要介護 5 は初回から 2 回目に、この割合が増加していた。要介護 3 では、減少していた。2 回目から 3 回目には、要介護 1 と 3 は減少するが要介護 5 は増加し、3 回目から 4 回目においては、要介護 1 と 3 は増加するのに対し、要介護 5 は減少していた。

表 112 要介護度別 同じ話をする「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	13.0	19.9	25.9	26.8	22.8	16.4	20.8
2回目	8.7	14.8	21.6	24.1	24.4	22.1	17.3	21.1
3回目	13.0	17.1	21.0	24.0	23.8	21.3	20.0	21.2
4回目	17.4	18.3	21.8	22.8	24.3	20.2	17.9	21.4

(49) 大声をだすことが (大声を出す)

全体としての大声をだすという問題行動は、初回は、「ない」が 14,641 名 (90.6%)、「ときどきある」が 664 名 (4.1%)、「ある」が 851 名 (5.3%) であった。2 回目は、「ない」が 14,687 名 (90.9%)、「ときどきある」が 639 名 (4.0%)、「ある」が 830 名 (5.1%) であった。3 回目は、「ない」が 14,533 名 (90.0%)、「ときどきある」が 673 名 (4.2%)、「ある」が 950 名 (5.9%) であった。4 回目は、「ない」が 14,358 名 (88.9%)、「ときどきある」が 714 名 (4.4%)、「ある」が 1,084 名 (6.7%) であった。

これらの結果から、大声をだすという問題行動がある要介護高齢者の割合は、初回 9.4%、から 2 回目 9.1%と初回から 2 回目にかけては減少するが、3 回目 10.0%、4 回目に 11.1%と示され、2 回目以降は増加していた。

要介護度別の大声を出す問題行動の割合は、非該当から要介護 1 までは、認定回数が増加するにしたがって増加していた。要介護 2 から 5 までは、初回から 2 回目に減少し、3 回目に増加し、4 回目にも増加というパターンが多かった。

表 113 要介護度別大声を出す「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	3.1	6.3	12.4	16.6	18.7	18.5	9.4
2回目	4.3	3.5	7.0	11.8	14.9	15.7	14.3	9.1
3回目	8.7	4.3	8.0	12.9	15.6	16.7	15.2	10.0
4回目	8.7	5.6	8.8	14.4	16.3	18.3	15.2	11.1

(50) 助言や介護に抵抗することが (介護に抵抗)

全体としての助言や介護に抵抗するという問題行動については、初回は「ない」が 13,639 名 (84.4%)、「ときどきある」が 1,064 名 (6.6%)、「ある」が 1,453 名 (9.0%) であった。2 回目は、「ない」が 13,551 名 (83.9%)、「ときどきある」が 1,090 名 (6.7%)、「ある」が 1,515 名 (9.4%) であった。3 回目は、「ない」が 13,350 名 (82.6%)、「ときどきある」が 1,097 名 (6.8%)、「ある」が 1,709 名 (10.6%) であった。4 回目は、「ない」が 13,154 名 (81.4%)、「ときどきある」が 1,169 名 (7.2%)、「ある」が 1,833 名 (11.3%) であった。

これらの結果から、大声をだす問題行動は、初回は 15.6%、2 回目 16.1%、3 回目 17.4%、4 回目 18.6% と認定回数が増加するにしたがって、漸次、増加していた。

要介護別には、非該当から要介護 1 までは、認定回数が増えるにしたがって、介護に抵抗する割合は増加していた。要介護 2 から 5 においては、初回から 2 回目に減少していた。また、要介護 2 から 4 までは、2 回目から 3 回目に増加し、3 回目から 4 回目も増加していたが、一方で、要介護 5 は 2 回目から 3 回目にも問題行動の割合は減少していた。

表 114 要介護度別介護に抵抗「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	6.1	11.9	20.8	26.6	24.5	20.9	15.6
2回目	4.3	7.8	14.2	20.4	24.1	21.1	19.4	16.1
3回目	8.7	9.0	15.5	22.2	25.5	21.2	17.3	17.4
4回目	8.7	11.3	16.9	22.5	26.2	22.0	19.1	18.6

(51) 目的もなく動き回ることが (常時の徘徊)

全体として、目的もなく動き回るとい問題行動は、初回は「ない」が 14,650 名 (90.7%)、「ときどきある」が 466 名 (2.9%)、「ある」が 1,040 名 (6.4%) であった。2 回目は、「ない」が 14,659 名 (90.7%)、「ときどきある」が 447 名 (2.8%)、「ある」が 1,050 名 (6.5%) であった。3 回目は、「ない」が 14,610 名 (90.4%)、「ときどきある」が 413 名 (2.6%)、「ある」が 1,133 名 (7.0%) であった。4 回目は、「ない」が 14,539 名 (90.0%)、「ときどきある」が 429 名 (2.7%)、「ある」が 1,188 名 (7.4%) であった。

このように、常時徘徊がある割合は、初回と 2 回目は 9.3% と同様であり、3 回目は 9.6% とわずかに増加し、4 回目 10.0% と増加していた。

要介護度別には、常時徘徊は要介護3で最もよく発生していた。非該当から要介護1までは、認定回数が増えるにしたがって、常時徘徊の割合も増加していた。逆に要介護3と要介護4は、認定回数が増えるにしたがって、常時徘徊の割合は減少していた。要介護2は、初回から2回目には、常時徘徊の割合は減少するが、2回目から4回目には、漸次、増加していた。また、要介護5では、初回から3回目までは減少するが、4回目で増加していた。

表 115 図 要介護度別常時の徘徊「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.4	5.7	14.2	20.3	15.6	9.0	9.3
2回目	0	2.7	7.1	13.1	17.3	13.7	7.8	9.3
3回目	0	3.5	7.8	13.3	16.5	12.5	6.9	9.6
4回目	4.3	4.6	8.6	14.1	15.1	11.7	7.2	10.0

(52) 「家に帰る」等と言い落ち着きがないことが (帰宅願望)

全体として、初回は「ない」が 14,953 名 (92.6%)、「ときどきある」が 468 名 (2.9%)、「ある」が 753 名 (4.5%) であった。2回目は、「ない」が 14,986 名 (92.8%)、「ときどきある」が 489 名 (3.0%)、「ある」が 681 名 (4.2%) であった。3回目は、「ない」が 14,823 名 (91.7%)、「ときどきある」が 502 名 (3.1%)、「ある」が 831 名 (5.1%) であった。4回目は、「ない」が 14,764 名 (91.4%)、「ときどきある」が 493 名 (3.1%)、「ある」が 899 名 (5.6%) であった。

このような帰宅願望によって起こる、行動の異常という問題行動がある割合は、初回が 7.4%から、2回目 7.2%へと減少するが、3回目 8.3%、4回目 8.6%へと増加していた。

要介護度別には、非該当ではこのような問題行動は起こっていなかった。要介護3と4で最もよく起こっている問題行動であった。要支援から要介護2までは、認定回数が増えるにしたがって、この問題行動がある割合は増えていた。逆に要介護4と5では、認定回数が増えるにしたがって、この問題行動の割合は減少していた。要介護3は、初回から3回目までは、漸次、減少していたが4回目で増加していた。

表 116 要介護度別帰宅願望による落ち着き「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.2	4.8	10.2	15.8	14.3	11.9	7.4
2回目	0	1.8	5.3	10.5	13.2	11.4	9.6	7.2
3回目	0	3.1	7.5	11.1	12.5	10.6	8.7	8.3
4回目	0	4.3	7.6	11.7	12.8	9.3	6.6	8.6

(53) 外出すると病院、施設、家などに一人で戻れなくなることが（外出して戻れない）

全体としては、外出すると病院、施設、家などに一人で戻れなくなることについては、初回は、「ない」が 15,192 名（92.6%）、「ときどきある」が 418 名（2.9%）、「ある」が 546 名（4.5%）であった。2 回目は、「ない」が 15,251 名（92.8%）、「ときどきある」が 369 名（3.0%）、「ある」が 536 名（4.2%）であった。3 回目は、「ない」が 15,236 名（91.7%）、「ときどきある」が 299 名（3.1%）、「ある」が 621 名（5.1%）であった。4 回目は、「ない」が 15,207 名（91.4%）、「ときどきある」が 314 名（3.1%）、「ある」が 635 名（5.6%）であった。

これらの結果、外出すると病院、施設、家などに一人で戻れなくなる問題行動の発生は、初回 6.0%で、2 回目 5.6%と減少し、3 回目 5.7%と増加、4 回目に 5.9%とさらに増加していた。

要介護度別にみると、要介護 3 でこの問題行動はよく発生していた。非該当では初回、2 回では全く発生していなかったが、3 回目、4 回目でもともに 4.3%発生していた。要支援、要介護 1 は、認定回数が増えるにしたがって、外出して戻れないという問題行動が発生する割合も増えていた。要介護 2 から 4 までは、初回から 2 回目に問題行動は減少していたが、要介護 5 では増加していた。2 回目から 3 回目においては、要介護 2 と 4 は増加していたが、要介護 3 と 5 では減少していた。3 回目から 4 回目は、要介護 2、3、4 では減少していたが、要介護 5 では増加していた。

表 117 要介護度別 外出して戻れないことが「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.0	4.3	9.2	12.7	7.3	2.4	6.0
2回目	0	1.8	4.7	7.9	9.8	6.8	4.5	5.6
3回目	4.3	2.0	4.8	8.6	8.6	7.4	2.7	5.7
4回目	4.3	2.7	5.7	7.7	8.4	6.5	3.3	5.9

(54) 一人で出たがり目が離せないことが（一人で出たがる）

全体として、1人で外に出たがり目が離せないことが、初回は「ない」が 15,009 名（92.9%）、「ときどきある」が 412 名（2.6%）、「ある」が 735 名（4.5%）であった。2 回目は「ない」が 14,988 名（92.8%）、「ときどきある」が 449 名（2.8%）、「ある」が 719 名（4.5%）であった。3 回目は「ない」が 14,995 名（92.8%）、「ときどきある」が 411 名（2.5%）、「ある」が 750 名（4.6%）であった。4 回目は「ない」が 14,952 名（92.5%）、「ときどきある」が 419 名（2.6%）、「ある」が 785 名（4.9%）であった。

このように一人で外に出たがり目が離せないという問題行動がある割合は、初回 7.1%、2 回目、3 回目 7.2%、4 回目 7.5%とわずかに増加していた。

要介護度別には、要介護 3 でこの問題行動は多く発生していた。要支援、要介護 1 では、

認定回数が増えるにしたがって、問題行動の割合も増加していた。逆に要介護3と4は、初回から4回目まで、認定回数が増えるにしたがって問題行動の割合は減少していた。要介護2は初回から3回目までは減少していたが、4回目で増加していた。要介護5は、初回と2回の発生率は5.4%と同じで、3回目に5.7%と増加したが、4回目に4.8%と減少していた。

表 118 要介護度別「一人で出たがること」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.6	5.0	10.5	15.9	10.9	5.4	7.1
2回目	0	2.1	6.0	10.0	13.5	8.9	5.4	7.2
3回目	4.3	3.0	6.5	9.8	11.1	7.9	5.7	7.2
4回目	0	3.7	6.9	10.3	10.9	6.9	4.8	7.5

(55) いろいろなものを集めたり、無断でもってこることが (収集癖)

全体として、収集癖という問題行動は、初回は「ない」が15,485名(95.8%)、「ときどきある」が221名(1.4%)、「ある」が450名(2.8%)であった。2回目は「ない」が15,420名(95.4%)、「ときどきある」が247名(1.5%)、「ある」が489名(3.0%)であった。3回目は「ない」が15,358名(95.1%)、「ときどきある」が247名(1.5%)、「ある」が551名(3.4%)であった。4回目は、「ない」が15,301名(94.7%)、「ときどきある」が237名(1.5%)、「ある」が618名(3.8%)であった。

これらの結果から、収集癖がある要介護高齢者の割合は、初回4.2%、2回目4.6%、3回目4.9%、4回目5.3%と増加していた。

要介護別にみると、要介護3での発生率が高かった。非該当から要介護1までは、すべて初回から4回目にかけて増加していた。要介護2は、初回から3回目までは収集癖のある割合が増加していたが、4回目では減少していた。要介護3においては、認定回数が増加するにしたがって、収集癖の割合は減少していた。要介護4と5は、初回から2回目には収集癖の割合は減少していた。また、2回目から3回目には、要介護4は増加していたが要介護5については、変化はなかった。さらに3回目から4回目においては、要介護4も要介護5も同様に増加していた。

表 119 要介護度別 収集癖が「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.9	3.1	6.3	8.5	5.3	2.1	4.2
2回目	0	1.5	3.8	6.5	8.4	4.9	1.8	4.6
3回目	0	1.7	4.5	7.0	7.9	5.8	1.8	4.9
4回目	4.3	2.4	5.0	6.8	7.7	6.1	3.0	5.3

(56) 火の始末や火元の管理ができないことが (火の不始末)

全体として、火の始末や火元の管理ができない問題行動が、初回は「ない」が14,198名

(87.9%)、「ときどきある」が1,088名(6.7%)、「ある」が870名(5.4%)であった。2回目は「ない」が14,539名(90.0%)、「ときどきある」が962名(6.4%)、「ある」が655名(4.1%)であった。3回目は「ない」が14,763名(91.4%)、「ときどきある」が849名(5.3%)、「ある」が544名(3.4%)であった。4回目は「ない」が14,939名(92.5%)、「ときどきある」が733名(4.5%)、「ある」が484名(3.0%)であった。

これらの結果から、火の始末や火元の管理ができない要介護高齢者の割合は、初回12.1%、2回目10.0%、3回目8.6%、4回目7.5%と認定回数が増えるにしたがって減少していた。

要介護度別には、火の不始末の問題行動が多いのは、要支援、要介護1、要介護2であった。非該当と要介護4以外は、すべて認定回数が増えるにしたがって、火の始末ができない割合は減少していた。非該当は、初回0%から2回目21.7%と増加し、3回目13.0%と減少、4回目8.7%とさらに減少していた。要介護4は、初回4.8%から3回目2.1%と減少するが、4回目に2.4%とわずかに増加していた。

表 120 要介護度別火の不始末が「ある」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	14.1	14.1	12.0	9.1	4.8	2.4	12.1
2回目	21.7	13.1	12.0	9.3	6.2	2.2	1.5	10.0
3回目	13.0	12.5	10.1	7.2	5.3	2.1	1.5	8.6
4回目	8.7	11.7	8.6	6.0	4.2	2.4	1.5	7.5

(57) 物や衣類を壊したり、破いたりすることが(物や衣類を壊す)

全体としては、物や衣類を壊したり、破いたりすることについては、初回は「ない」が15,888名(98.3%)、「ときどきある」が135名(0.8%)、「ある」が133名(0.8%)であった。2回目は「ない」が15,896名(98.4%)、「ときどきある」が127名(0.8%)、「ある」が133名(0.8%)であった。3回目は「ない」が15,841名(98.1%)、「ときどきある」が174名(0.9%)、「ある」が141名(1.1%)であった。4回目は「ない」が15,815名(97.9%)、「ときどきある」が166名(1.0%)、「ある」が175名(1.1%)であった。

これらの結果から、物や衣類を壊したり、破いたりする要介護高齢者の割合は、初回1.7%から、2回目1.6%と減少し、3回目1.9%と増加、4回目も2.1%と増加していた。

要介護度別の破壊行動の発生率は、要介護4と3に高かった。非該当から要介護2までは、概ね認定回数が増加するにしたがって、物や衣類を壊す破壊行動の割合が増えていた。要介護3から5までは、初回から2回目に、破壊行動の発生割合は減少していた。2回目から3回目には、要介護3では、発生率が高くなっていったが、要介護4と5では低くなっていった。3回目から4回目においては、要介護3から5までのすべてにおいて、発生率は高くなっていった。

表 121 要介護度別物や衣類を壊すことが「ある」の割合（％）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.2	0.9	1.9	3.9	4.3	3.9	1.7
2回目	0	0.4	1.0	2.1	3.6	3.3	1.5	1.6
3回目	4.3	0.5	1.6	2.6	3.8	2.7	1.2	1.9
4回目	4.3	1.1	1.6	2.6	3.9	3.0	2.1	2.1

(58) 不潔行為

全体として、不潔な行為は、初回は「ない」が 15,432 名（95.5%）、「ときどきある」が 332 名（2.1%）、「ある」が 392 名（2.4%）であった。2 回目は「ない」が 15,434 名（95.5%）、「ときどきある」が 305 名（1.9%）、「ある」が 417 名（2.6%）であった。

3 回目は「ない」が 15,490 名（95.9%）、「ときどきある」が 281 名（1.7%）、「ある」が 385 名（2.4%）であった。4 回目は、「ない」が 15,430 名（95.5%）、「ときどきある」が 299 名（1.9%）、「ある」が 427 名（2.6%）であった。

このように不潔行為が初回と 2 回目、4 回目が 4.5% の発生率で 3 回目が 4.1% とわずかに低い割合を示していたが、4 回目のそれぞれにおいて、ほとんど変化はなかった。

要介護別に不潔行為の発生率が高かったのは、要介護 3 が 11.2%、要介護 4 が 10.1%、要介護 5 が 11.6% であった。非該当について、初回から 4 回まで不潔行為があるものはいなかった。要支援は、初回から 4 回まで、漸次、増加していた。要介護 1 は、初回から 2 回目に増加し、3 回目は変化がなかったが、4 回目は増加していた。要介護 2 は、初回と 2 回目は同じであり、3 回目わずかに減少したが、4 回目に再び増加していた。要介護 3 から 5 までは、初回から 4 回目まで、認定回数が増加するにしたがって、不潔行為の割合が減少していた。

表 122 要介護度別 不潔行為「ある」の割合（％）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.5	1.9	6.0	11.2	10.1	11.6	4.5
2回目	0	1.0	2.7	6.0	9.7	8.9	6.3	4.5
3回目	0	1.3	2.7	5.9	7.6	7.5	5.4	4.1
4回目	0	1.9	3.5	6.2	7.3	6.7	3.9	4.5

(59) 食べられないものを口に入れることが（異食行動）

全体としての異食行動は、初回は「ない」が 15,929 名（98.7%）、「ときどきある」が 123 名（0.6%）、「ある」が 104 名（0.8%）であった。2 回目は「ない」が 15,928 名（98.6%）、「ときどきある」が 140 名（0.5%）、「ある」が 88 名（0.9%）であった。3 回目は「ない」が 15,886 名（98.3%）、「ときどきある」が 158 名（0.7%）、「ある」が 112 名（1.0%）で

あった。4回目は「ない」が15,858名(98.2%)、「ときどきある」が170名(0.8%)、「ある」が128名(1.1%)であった。

このように異食という問題行動は、初回と2回目1.4%、3回目1.7%、4回目1.8%と認定回数が増えるにしたがって、わずかに増加していたが、かなり低い割合であった。

要介護度別には、この問題行動が多かったのは、要介護3と4であった。非該当は、初回から3回目までは0であったが、4回目に4.3%を示していた。要支援は、初回と2回が0.2%、3回目が0.5%とわずかに増加したが、4回目には減少していた。要介護1は、初回から4回目まで、認定回数の増加に伴って、問題行動の割合もわずかに増加していた。要介護2は初回から、3回目までは増加していたが、4回目でわずかに減少していた。要介護3は、初回から2回目は減少していたが、3回目には変化がなく、4回目には増加していた。要介護4は、初回から3回目までは減少していたが、4回目で増加していた。要介護5は、初回から2回目までで減少し、2回目から3回目で増加するが、3回目から4回目で、再び減少していた。

表 123 要介護度別 異食行為が「ある」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.2	0.7	1.5	3.7	4.0	2.7	1.4
2回目	0	0.2	1.0	1.9	3.2	2.7	0.9	1.4
3回目	0	0.5	1.1	2.6	3.2	1.9	1.8	1.7
4回目	4.3	0.3	1.6	2.5	3.6	2.1	1.5	1.8

(60) ひどい物忘れ

全体としてのひどい物忘れについては、初回は「ない」が8,070名(50.0%)、「ときどきある」が3,325名(20.6%)、「ある」が4,761名(29.5%)であった。2回目は「ない」が7,927名(49.1%)、「ときどきある」が3,351名(20.7%)、「ある」が4,878名(30.2%)であった。3回目は「ない」が7,902名(48.9%)、「ときどきある」が3,153名(19.5%)、「ある」が5,101名(31.6%)であった。4回目は「ない」が8,074名(50.0%)、「ときどきある」が2,973名(18.4%)、「ある」が5,109名(31.6%)であった。

このように、ひどい物忘れがある割合は、初回は50%、2回目は50.9%、3回目は51.1%と増加するが、4回目は50.0%と減少していた。

要介護度別に、ひどい物忘れの割合が高かったのは、要介護3であった。要支援では、ひどい物忘れがある割合は、認定回数が増えるにしたがって増えていた。しかし、要介護2から5までは、減少していた。要介護1では、ひどい物忘れが初回から3回目までは増加するが、4回目で減少していた。

表 124 要介護度別 ひどい物忘れが「ある」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	26.1	39.7	48.2	56.6	58.0	55.2	48.4	50.0
2回目	52.2	44.1	50.8	56.1	54.4	50.2	46.0	50.9
3回目	43.5	45.6	51.4	55.6	52.9	49.2	46.3	51.1
4回目	56.5	47.1	49.7	54.4	50.3	47.3	42.1	50.0

2.医療処置項目からみた経年的変化

(1) 点滴の管理

全体としての点滴の管理は、初回は「ない」が 15,266 名 (94.5%)、「ある」が 890 名 (5.5%) であった。2 回目は「ない」が 15,633 名 (96.8%)、「ある」が 523 名 (3.2%) であった。3 回目は「ない」が 15,628 名 (96.7%)、「ある」が 528 名 (3.3%) であった。4 回目は「ない」が 15,612 名 (96.6%)、「ある」が 544 名 (3.4%) であった。

このように点滴の管理は、初回は 5.5% にあったが、2 回目は 3.2% と減少し、3 回目 3.3% と増加し、4 回目も 3.4% と増加していた。

要介護度別には、要介護 5 に点滴の管理の割合が高く、初回は 26.6% を示していた。要介護 4 も高く 10.9% であった。初回から 2 回目で点滴の管理が増加したのは、要支援だけだった。他の要介護度は、すべて減少し、要介護 3 は、7.4% から 2.7% へ、要介護 4 は、10.9% から 2.4% へ、要介護 5 は、26.6% から 2.4% と急激に低下していた。2 回目から 3 回目に、要介護 2 と要介護 5 において、点滴の管理の割合が増加していた。3 回目から 4 回目においては、非該当が 0% から 13.0% へ増加し、要介護 1 も 3.6% から 3.9% へ、要介護 3 も 2.8% から 3.0% へ、要介護 4 も 2.0% から 2.5% へと増加したが、要介護 2 は、3.1% から 2.8% へ減少し、要介護 5 も 3.6% から 2.7% へと減少した。

表 125 要介護度別 点滴の管理が「ある」割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	2.4	4.9	4.8	7.4	10.9	26.6	5.5
2回目	4.3	3.6	3.6	2.9	2.7	2.4	2.4	3.2
3回目	0	3.5	3.6	3.1	2.8	2.0	3.6	3.3
4回目	13.0	3.5	3.9	2.8	3.0	2.5	2.7	3.4

(2) 中心静脈栄養

全体として、中心静脈栄養は、初回は「ない」が 16,128 名 (99.8%)、「ある」が 28 名 (0.2%) であった。2 回目は「ない」が 16,142 名 (99.9%)、「ある」が 14 名 (0.1%) であった。3 回目は「ない」が 16,142 名 (99.9%)、「ある」が 14 名 (0.1%) であった。4 回目は「ない」が 16,123 名 (99.8%)、「ある」が 33 名 (0.2%) であった。このように中心静脈栄養は、発生率が初回から 4 回まで、0.2% から 0.1% とわずかに減少した。

要介護度別には、要介護 5 での発生率が高く、初回が 4.5% と示されたが、2 回目は 0.3% と大幅に低下していた。

表 126 要介護度別 中心性脈栄養が「ある」割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0	0.2	0	0.4	4.5	0.2
2回目	0	0.1	0.1	0.1	0	0.3	0.3	0.1
3回目	0	0.1	0.1	0	0.1	0.3	0.3	0.1
4回目	0	0.1	0.1	0.2	0.6	0.3	0.6	0.2

(3) 透析

全体として、透析は、初回は「ない」が 15,992 名 (99.0%)、「ある」が 164 名 (1.0%) であった。2 回目は「ない」が 15,980 名 (98.9%)、「ある」が 176 名 (1.1%) であった。3 回目は「ない」が 15,966 名 (98.8%)、「ある」が 190 名 (1.2%) であった。4 回目は「ない」が 15,949 名 (98.7%)、「ある」が 207 名 (1.3%) であった。

このように透析は、初回から 4 回目の発生率は、1.0%から 1.3%とわずかに増加していた。

要介護度別に、発生率が高かったのは、要介護 5 の 2.1%であった。すべての要介護度において透析は発生していたが、増加や減少といった変動は、ほとんどなかった。

表 127 要介護度別 透析の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.5	1.2	1.0	1.3	0.8	2.1	1.0
2回目	0	0.5	1.2	1.2	1.3	0.8	2.1	1.1
3回目	0	0.6	1.3	1.3	1.4	0.8	2.1	1.2
4回目	0	0.7	1.4	1.5	1.4	0.9	2.1	1.3

(4) ストーマの処置

全体としてストーマの処置は、初回は、「ない」が 16,126 名 (99.8%)、「ある」が 30 名 (0.2%) であった。2 回目は、「ない」が 16,118 名 (99.8%)、「ある」が 38 名 (0.2%) であった。3 回目は、「ない」が 16,117 名 (99.8%)、「ある」が 39 名 (0.2%) であった。4 回目は、「ない」が 19,111 名 (99.7%)、「ある」が 45 名 (0.3%) であった。

このように、ストーマの利用は 0.2%から 0.3%で、低い割合であった。

要介護別には、要介護 3 の 0.5%が他の要介護より、わずかに高い割合であったが、認定回数による変動は、要介護度別にみてもほとんどみられなかった。

表 128 要介護度別 ストーマの処置が「ある」割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0.2	0.2	0.5	0	0	0.2
2回目	0	0.1	0.2	0.3	0.5	0.1	0.3	0.2
3回目	0	0.2	0.2	0.2	0.5	0.1	0.3	0.2
4回目	0	0.1	0.2	0.4	0.4	0.2	0.3	0.3

(5) 酸素療法

全体として酸素療法は、初回は「ない」が 15,919 名 (98.5%)、「ある」が 237 名 (1.5%) であった。2 回目は「ない」が 15,922 名 (98.6%)、「ある」が 234 名 (1.4%) であった。3 回目は「ない」が 15,906 名 (98.5%)、「ある」が 250 名 (1.5%) であった。4 回目は「ない」が 15,862 名 (98.2%)、「ある」が 294 名 (1.8%) であった。

このように酸素療法は、初回が 1.5%、2 回目 1.4%と減少し、3 回目 1.5%と増加、4 回目は、1.8%と増加していたが、発生率が高い処置ではない。

要介護別には、要介護 5 の初回が最も高く 6.6%を示していたが、2 回目は、2.4%と減少していた。要介護 3 から 5 までは初回から 2 回目で、発生率が減少していた。要支援から要介護 2 までは、認定回数が増加するにしたがって、酸素療法の割合が高くなっていた。

表 129 要介護度別 酸素療法が「ある」割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	1.6	1.1	1.1	1.6	2.4	6.6	1.5
2回目	8.7	1.7	1.5	1.3	1.0	1.4	2.4	1.4
3回目	8.7	2.0	1.6	1.2	1.2	1.4	2.1	1.5
4回目	4.3	2.1	2.1	1.4	1.3	1.6	2.4	1.8

(6) レスピレーター

全体としてレスピレーターは、初回は「ない」が 16,149 名 (100.0%)、「ある」が 7 名 (0.0%) であった。2 回目は「ない」が 16,150 名 (100.0%)、「ある」が 6 名 (0.0%) であった。3 回目は「ない」が 16,148 名 (100.0%)、「ある」が 8 名 (0.0%) であった。4 回目は「ない」が 16,145 名 (99.9%)、「ある」が 11 名 (0.1%) であった。

このように、レスピレーターは、ほとんど利用されていなかった。

表 130 要介護度別 レスピレーター「ある」割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0	0	0.1	0.1	0.3	0
2回目	0	0	0	0	0.1	0	0.3	0
3回目	0	0.1	0	0	0.1	0	0	0
4回目	0	0.2	0.1	0	0	0	0	0.1

(7) 気管切開の処置

全体として気管切開の処置は、初回は「ない」が 16,136 名 (99.9%)、「ある」が 20 名 (0.1%) であった。2 回目は「ない」が 16,145 名 (99.9%)、「ある」が 11 名 (0.1%) で

あった。3回目は「ない」が16,142名(99.9%)、「ある」が14名(0.1%)であった。4回目は「ない」が16,135名(99.9%)、「ある」が21名(0.1%)であった。

このように、気管切開を行っているものは、初回から4回まで0.1%と少なかった。要介護度別には、要介護5に発生率が高かったが、初回1.5%から、2回目0.9%、3回目0.6%、4回目0.3%と減少していた。

表 131 要介護度別 気管切開の処置が「ある」割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.5	1.5	0.1
2回目	0	0.1	0	0.1	0	0.2	0.9	0.1
3回目	0	0.1	0	0.1	0	0.2	0.6	0.1
4回目	0	0.2	0	0.2	0	0.2	0.3	0.1

(8) 疼痛の看護

全体としては疼痛の看護は、初回は「ない」が14,253名(88.2%)、「ある」が1,903名(11.8%)であった。2回目は「ない」が14,208名(87.9%)、「ある」が1,948名(12.1%)であった。3回目は「ない」が14,258名(88.3%)、「ある」が1,898名(11.7%)であった。4回目は「ない」が14,267名(88.3%)、「ある」が1,889名(11.7%)であった。

このように、疼痛の看護の発生率は、初回が11.8%、2回目12.1%と増加し、3回目、4回目は、11.7%と減少していた。

要介護度別には、初回は要介護5が13.1%と高い割合を示していた。しかし、2回目には、要支援が14.5%、要介護1が13.3%と高く、3回目においては、要支援が15.2%、4回目も15.0%と高い割合を示していた。

初回から2回目にかけては、非該当から要介護2までは、疼痛の看護は増加していたが、要介護3から要介護5までは、減少していた。2回目から3回目は、要支援は増加していたが、他の要介護度はすべて減少していた。3回目から4回目は、要介護2と要介護5が増加し、それ以外は減少していた。

表 132 要介護度別 疼痛の看護が「ある」割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	8.7	12.6	12.7	10.3	10.0	12.0	13.1	11.8
2回目	17.4	14.5	13.3	10.4	9.9	8.2	9.3	12.1
3回目	17.4	15.2	13.0	9.4	9.0	8.8	7.8	11.7
4回目	17.4	15.0	12.9	9.9	8.3	7.9	9.9	11.7

(9) 経管栄養

全体としての経管栄養は、初回は「ない」が16,112名(99.7%)、「ある」が44名(0.3%)であった。2回目は「ない」が16,117名(99.8%)、「ある」が39名(0.2%)であった。3回目は「ない」が16,109名(99.7%)、「ある」が47名(0.3%)であった。4回目は「ない」が16,014名(99.1%)、「ある」が142名(0.9%)であった。

このように経管栄養がある割合は、初回の0.3%から、2回目0.2%と減少していたが、4回目は0.9%と増加していた。

要介護度別には、要介護5での発生率が高く、初回が8.1%と最も高くなっていた。要支援から要介護3までは、認定回数の増加に伴って、経管栄養の発生率も高くなっていたが、要介護4と5は3回目までは減少し、4回目で増加していた。

表 133 要介護度別経管栄養が「ある」割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0	0.1	0.1	1.0	8.1	0.3
2回目	0	0.1	0	0.2	0.3	0.9	3.6	0.2
3回目	0	0.1	0.1	0.2	0.5	0.8	3.3	0.3
4回目	0	0.4	0.7	0.7	1.3	2.3	4.2	0.9

(10) モニター測定

全体として、モニター測定は、初回は「ない」が16,102名(99.7%)、「ある」が54名(0.3%)であった。2回目は「ない」が16,041名(99.7%)、「ある」が47名(0.3%)であった。3回目は「ない」が16,110名(99.7%)、「ある」が46名(0.3%)であった。4回目は「ない」が16,097名(99.6%)、「ある」が59名(0.4%)であった。このようにモニター測定は、0.3%程度と、低い発生率であった。

要介護度別には、要介護5の初回の2.7%が最も高い割合であった。要介護5は、2回目は0%と減少し、3回目0.3%、4回目0.9%と増加していたが、発生率はかなり低かった。いずれの要介護度においても発生率はかなり低く、経年的に増加する傾向はみられなかった。

表 134 要介護度別 モニター測定が「ある」割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	0	0.3	0.3	0.4	0.9	2.7	0.3
2回目	4.3	0.2	0.3	0.3	0.3	0.4	0	0.3
3回目	0	0.2	0.3	0.2	0.5	0.2	0.3	0.3
4回目	4.3	0.4	0.4	0.2	0.3	0.5	0.9	0.4

(11) じょくそうの処置

全体として、じょくそうの処置については、初回は「ない」が15,987名(99.0%)、「あ